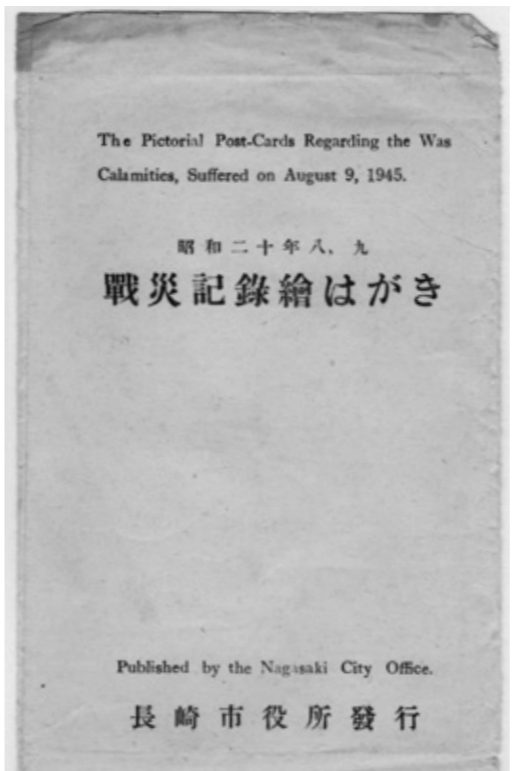


まぼろしの 「原爆絵はがき」の発行元は長崎市だった

堀田 武弘

戦争が終わって間もなく、原爆で大きな痛手を負った長崎の廃墟を写した絵はがきが発行されている。絵はがきが入る袋のタイトルには「昭和二十年八、九 戦災記録繪はがき 長崎市役所發行」と印刷されており、これまでに何度か新聞紙上で紹介されているが、なぜかその発行元や発行日が長崎国際文化会館（当時・長崎原爆資料館の前身）等の専門家の間でも確認がとれないまぼろしの絵はがきとなっていた。

筆者が所蔵するこの絵はがきの総数は十二枚十二種で、この中には浦上天主堂の廃墟に仮祭壇を設け、生き残った信者六百人が参列し、昭和二十年十一月二十三日に挙行された「被爆死者合同慰霊祭」がある。またこの他、城山小学校の絵はがきもあり、タイトルは「城山国民学校、市営住宅の向こうに廃墟となった校舎」となっている。国民学校が小学校と変わるのは昭和二十二年の新学期からだ。当時の浦上一帯は色がなく



十二枚の原爆絵はがきが入った袋

と同様な答えに終始してきたが、上記の『長崎新聞』の記事により原爆の災禍から一年余り後の、昭和二十一年に長崎市が発行したことが判明したので一挙に疑問が解消した。



「記念塔建設予定地」と説明がある廃墟となった浜口町高台一帯

発行された十二種の絵はがき、その一枚は長崎市役所の遠景、この写真はおそらく長崎市役所に勤務し、原爆で妻子三人を奪われた木野普見雄氏の要望でその中の一枚に加えられたものだろう。木野氏は原爆歌曲の名曲、城山小の『子らのみ魂よ』、山里小の『あの子』の歌の作曲者である。また廃墟の中に残る城山国民学校の全景写真もあり、この写真も城山の復興に生涯をささげた地元杉本亀吉氏の強い要望があったのだろう。（杉本氏は後に市会議員となる）その他に廃墟と化した城山町の市営住宅、長崎医科大学附属医院、甦った山王神社のクスノキ、倒壊した三菱製鋼所、紅蓮の炎に呑まれた福濟寺跡、烏有に帰した西中町天主堂廃墟、県庁・地方裁判所跡等がある。絵はがきには英文説明もあるが、おそらく長崎に進駐した米兵たちも帰国の際に、土産として持ち帰ったに違いない。浦上天主堂廃墟の英文説明は「The Urakami Roman Catholic Cathedral Destroyed by the Atomic Bomb」（原爆によって破壊された大聖堂）となっている。十二枚の写真の中、城山国民学校と三菱製鋼所の二点は「長崎市勢要覧」昭和二十四年版写真特集にも掲載されている。

あと二年で被爆七十五年の節目の年を迎える。木野普見雄氏や杉本亀吉氏、撮影した林主事らが願った恒久平和、核兵器廃絶の願いはいっ実現するのだろうか。

（公財）長崎平和推進協会会員 元NBC長崎放送ライブラリー担当

なった灰色の世界、音がない世界と言われており、その中心となる「浜口町高台」は南側から見た光景、焼失した立木等が写され、説明には「記念塔建設予定地」と記されている。

平成二十三年十一月に、千葉県佐倉市にある国立歴史民俗博物館が「風景の記録 写真資料を考える」という都市の変遷を特集した企画展を開催した。副館長をはじめ三人の研究者が筆者の勤務先を訪ねられ、収集した資料等をご覧になり、江戸・東京と並び長崎に非常に関心をもたれた。その後企画展の図録が発刊され、長崎関連では明治古写真や長崎原爆資料館所蔵の原爆関連写真が多数掲載されている。この中に筆者提供の「戦災記録繪はがき」も特別コーナーとしてページを割き、「被爆を記録した絵はがき」として紹介されている。説明に「詳細な発行時期は不明だが、用いられている活字から占領期、つまり原爆投下から数年以内ではないかと考えられる。流通範囲ははっきりしない。この絵はがきは戦後の比較的早い段階で発行されており、記録媒体としての性格が強い。（略）」と記載されているが、この特別展開催の時点でこれ以上の詳細なことは不明だった。

今年三月、戦後の動きを調べるため長崎県立図書館を訪ね、終戦直後の地元紙の紙面をめぐっていた時に、小さな記事が目にとまった。見出しは「原子被爆地をカメラに 写真、絵葉書として永久に記録」、記事は「長崎市では原子爆弾の戦災跡を永久に記録するため、浦上天主堂や長崎医科大学をはじめ、住宅の焼跡、廃墟化した工場の姿等を写真に記録すべく目下、林主事が中心になって撮影してゐる。これは近く写真画報とし、または絵葉書として一般にも頒布する予定である。」（『長崎新聞』（当時）昭和二十年十一月二十三日号）

筆者が放送局資料担当の現役だった時代に度々、この絵はがきについての問い合わせを受けた。しかし確認がないため、国立歴史民俗博物館

風信

○七月と言えは七夕。と、長崎の事を記した「年中行事抄」に記してある。出島出入のオランダ絵師川原慶賀がシーボルトの依頼により描いた「長崎年中行事絵図」にも、あてやかな遊里の軒下に立てられた大きな笹竹に和歌を記した短冊や色紙で作られた小さな着物、網などが結びつけられ下げられている。その日、家々では素麺を供え織姫・牽牛の二星を祀り習い物が上手になる事を御願いしたという。

○また慶賀の絵には「水神さま夏まつり」があり、大きな青竹に「祈水祖神」と書いた大きな白旗を中心に大人や子供達が銅鑼をたたき賑やかに騒ぐ風景が画いてある。戦前は中島川の上流、八幡町より銭屋川に行く小道に「水神さま」という横丁があり、水神の風呂屋さん、その横に倉田水樋跡があり現在は道わきに小さな石の祠が立っている。

茂木の「若菜川の川まつり」は昔より有名で、今も多くの人が集り賑やかであるという。

○次に七月十三日より十六日まで全国的には「お盆」の行事があるが、長崎では戦後、八月十三日より「長崎のお盆」は始まるので来月の「風信」欄に「精霊流し」の事を書くことにした。

○六月十七日（日）第九回長崎県九条の会あり。諫早、島原他県下の各九条の会代表が多く集り、井田洋子先生（長崎大学教授）、大矢正人先生（長崎総科大葛西よう子先生（女性史研究家）の三先生を中心に「この先どうなる 私たちの命とくらし」を話題とし、盛会のうちに終了することが出来た。有難うございました。

○長崎学ネットワーク会議より同会主催で七月二十六日（木）午後六時より長崎歴史博物館ホールで、松尾晋一先生（県立大教授を講師に「明治百五十年記念」して「薩英戦争と長崎」を主題にお話して下さるとの連絡あり。各位ご自由に御来会下さいとの事。（入場無料）

○八月は「夏休み」になるので、本会事務所は開所してありますが、毎週開催の各講座は「夏休み」とさせて載きます。

（今月）寄贈頂いた書籍

一、長崎経済研究所（十八銀行グループ）より、「ながさき経済No.345」最近の景況感と物価、二〇一八年春の新卒者採用と初任給及び採用計画について等。

長崎歴史文化協会研究室

TEL 八二二一五四〇
十八銀行公会堂前出張所 2F

